



編集後記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 住友, 陽文 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/12589

編集後記

「3.11」以降、私たちが目にしたのは震災被害と原発事故の現実であると同時に、この国のさまざまなシステムのいい加減さでした。政府や東電もしかりですが、それらをチェックし、隠れているモノを明らかにしなければいけない学問に関わる人びともそのいい加減さは同じでした。もちろんそのようなシステムから自由でありえた人はほとんどいなかったでしょう。「だまされた」という言葉は、敗戦の時から何度となく私たちが吐いてきた言葉です。今回も同じでした。私たちは本当はだまされていたのではないのです。だまされたフリをしていただけなのです。なぜなら、その方が心地良いからです。だまされたことにして、そんな不快で面倒くさいことなど、考えない事にしたのです。

戦後日本は一度も憲法を改正せずに来ました。その要因を「反戦への誓い」だけに求めることはできません。なぜなら世界で一番密度の濃い原子力開発をしてきたからです。戦後日本はアメリカからの警戒心を解くために護憲を堅持しながら同国から濃縮ウランの提供を受け、積極的に原子力政策を推進してきました。平和憲法と原子力開発（本質的には核開発）とを同居させるという、いわばごまかしを選択してきたのです。もちろんそのことで戦後日本は復興できたのです。憲法を改正するわけでもなく、原子力開発に失敗したいま、原子力を積極的に推進してきた側から、憲法は占領軍に押し付けられたから無効だと言う声が聞こえます。戦後日本のシステムの失敗の責を、いわば他者に転嫁しようとするその心性は、まさに「だまされた」というそれと同根のものです。原子力の推進者と、こっそりとそれを支えてきた者とは、こうして仲良く同じシステムを構築し続けてきたのです。

そういうカラクリに対して批判する声がないわけではありません。最近読んだ安富歩さんの『原発事故と「東大話法」』（明石書店）などはその一つで、言い方は辛辣ながらも、学問の世界に身を置く者にとってはやや耳の痛い、そして本質を突いた議論を展開しています。

文系の学問などは役に立たないという声もあり、それに不快感を感じるあまり私たちは反射的に「そんなことはない」と反論しがちですが、改めて人間を取り巻く環境とその内面を深く洞察する学問の意味を考える必要があります。それは「役に立つ／役に立たない」という図式それ自体から自立していることにはないでしょうか。文系学問が「精神を自由にする」学問に由来することも、そのことと無関係ではありません。システムのいい加減さを再検討するなら、それを支えてきた私たちの精神を今一度自由にする必要があるように思います。在野の学会の作法に囚われる必要のない紀要の存在の意味は、案外そういう部分にあるのかもしれない。7号をお届けします。（文責住友陽文）